



八王子千人同心屋敷跡の碑

八王子千人同心

八王子千人同心は、徳川氏が関東に入国した際、政治的又軍事的にも重要である八王子に配置した在郷武士団である。

八王子千人同心の系譜は古く、甲斐国武田氏家臣団の小人組に遡る。この小人組は、村々の名主層を頭として同心編成したもので、周りの敵国から甲斐国を守る役目を果たしていた。

武田家滅亡後徳川幕府の傘下に入り、八王子に配置された後、小人頭に拝領屋敷が与えられ、組下の同心の数も増加された。関ヶ原の戦い直前の慶長五年（一六〇〇）には、総勢千人からなる八王子千人同心が成立することになる。屋敷を持たない多くの同心達は、八王子周辺の農村で農耕に携わり、半農半士の生活を営んでいた。

◇散歩のみどころ

JR中央線西八王子駅北口から、千人同心発祥の地を巡る凡そ4kmの行程。甲州街道を出て、街道を東へ、五つ目の角を入ると千人同心頭石坂弥次衛門が自刀した興岳寺に着く。街道を戻り、東へ歩くと了法寺。更に東へ歩き、追分至る。ここには、千人同心屋敷跡の碑と甲州街道・陣馬街道の道標が建っている。旧陣馬街道を西へ歩き、市役所通りを北へ向かうと、左に千貫神輿で有名な多賀神社がある。そこから南浅川の水無瀬橋へ。再び旧陣馬街道に入り、鮎の献上記録が残る日吉八王子神社へ。馬場横町へ出て、武田家家臣や千人同心頭松本斗機蔵らが眠っている宗格院に着く。千人頭拝領馬場跡から南浅川に出て、南横川橋から旧甲州街道へ。地藏堂跡の碑と分岐道標の碑を見る。新旧甲州街道、長安寺そして銀杏並木を通り、西八王子駅で解散。

●千人町界隈の今昔

○千人町

八王子十五宿の西側に位置する。千人同心の拠点で千人頭の拝領屋敷などが軒を連ねる武家屋敷の町であった。

現在の千人町一丁目～四丁目は江戸期の八王子千人町の名をそのまま踏襲している。

○久保宿

八王子十五宿の一つ、現在の日吉町東半分

○本郷村

現在の元本郷町

○島ノ坊宿

八王子十五宿の一つ、修験者島ノ坊の宿坊があった。修験者島ノ坊の先祖の俊盛が文禄三年（一五九四）、ここに坊（僧の住居）を建てた。現在の日吉町西半分と千人町二丁目一部の地



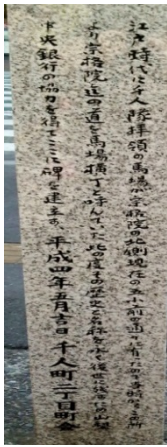
江戸時代の千人町界隈

①馬場横丁

甲州街道、千人町二丁目の宗格院へ通じる道路を馬場横丁と呼んでいる。江戸時代、宗格院北側から西にかけて千人頭の馬の訓練場があったところから名付けられた。また、拝領馬場とも呼ばれ、細長く二千二百十六坪（約七、〇二〇_坪）の面積があったという。



馬場横丁道標



側面

②万松山興岳寺

千人町一・二・八

宗派 曹洞宗
本尊 東方薬師瑠璃光如来
寺宝 本尊薬師如来

聖観世音菩薩（白檀製）

木彫四天王像 木彫十二神像

石坂弥次右衛門義禮顕彰碑

随翁舜悦禅師

開基 石坂弥次右衛門（二代目）

開山 文禄元年（一五九二）



甲州街道から見た馬場横丁

本尊の左右に日光菩薩、月光菩薩が立っている。文化六年（一八〇九）火災で堂宇全焼。さらに戦災で全焼した。現堂宇はその後再建されたが、区画整理により敷地は分断され、本堂と墓域の間に道路が通っている。墓域に石坂弥次右衛門義礼の墓がある。千人頭石坂家十一代の弥次右衛門義礼は文化六年（一八〇九）に生まれ、慶応四年（一八六八）に亡くなっている。

弥次右衛門は、慶応四年に急死した千人頭萩原友親に代わり、日光の火の番頭として赴任した。勤番中官軍に攻められた折に、参謀の板垣退助らに日光を明け渡して八王子に帰った。しかし、一戦も交えず日光を明け渡した責任を取って自刃した。その後、日光を戦火から救ったことが認められた。法名は「興樹院殿大忍義禮」。墓の左右の灯籠と水盤に、千人同心四十五名と、弥次右衛門義礼の家来二名の名が刻まれている。石坂弥次右衛門顕彰碑が境内の西隅

に建っている。昭和四十九年（一九七四）、日光市と八王子市は姉妹都市となり、現在に至っている。



石坂弥次右衛門の墓



興 岳 寺



石坂弥次右衛門が自刃した脇差



日光市から寄贈された
水鉢と花生け



千人同心石坂弥次右衛門ら



千人同心石坂弥次右衛門ら

③ 松栄山了法寺

日吉町二一

宗派 日蓮宗

本尊 大曼荼羅御本尊

延徳元年（一四八九）に元八王子に創建したと伝えられている。江戸初期現地に移転。大正五年（一九一六）に中興、その後戦災により焼失し戦後再建した。弁財天（八王子七福神）を祀り、良縁成就の縁結びや子育てに功德があるとか。近年では「萌え看板」で有名。



了 法 寺



お岩稲荷大明神



お岩稲荷



萌え看板 とろ美作



弁 財 天

④追分の道標

追分町

この道標は、文化八年（一八一二）、江戸の足袋職人清八という人の寄進である。高尾山に銅製五重塔を奉納した記念に、甲州街道の新宿、八王子、高尾山麓小名路の三追分に建てた道標の一つ。追分の道標碑面には、

「左甲州道中高尾山道」

「右あんげ道」

「文化八年六月江戸清八」

と刻まれている。昭和二十年八月二日の八王子空襲により四つに割れ、一部は不明、基部は地元、一部は郷土資料館に置かれていた。地元の要望を受け、平成十五年五月に復元された。「桑都日記」にも、千人屋敷に建立の願いを出している事実が記載されている。尚、この道標は平成二十五年二月中旬まで追分けの歩道橋脇に建てられていたが、交番設置のため、現在は交番前に移動されている。



左 甲州街道
中 高尾山



甲州街道



千人同心屋敷跡碑

⑤千人同心屋敷跡碑

追分町

同心屋敷跡の碑は、甲州街道と陣馬街道の分岐する地点にある。寛政元年（一七八九）屋敷図によればこの場所は千人頭原半左衛門組屋敷があった所。碑は、昭和三十五年（一九六〇）建立。菅原香風の揮毫による。

【久保宿】

江戸時代から明治初期にかけての陣馬街道沿いの宿場名。八王子横山十五宿の一つ。現在の日吉町東半分にあたる。明治十五年（一八八二）嶋の坊宿と合わせて久島町（現在町名は無し）となる。

【嶋の坊宿】

江戸時代から明治初期にかけての陣馬街道沿いの宿場名。八王子横山十五宿の一つ。現在の日吉町西半分と千人町二丁目の一部にあたる。江戸期に修験者嶋の坊の宿坊があったことからこの名が付いた。明治十五年（一八八二）久保宿と合わせて久島町（現在町名は無し）となる。

●日吉町

市街地の西端にある。大正元年（一九一二）十月一日町名改正により町名が確定。それまでの八王子久嶋町と本郷村の一部が吉町となり、八王子市制施行を経て今日に至る。西端には南浅川水無瀬橋が架かり、東端には甲州街道、北寄りには陣馬街道が走る。

●千人町

江戸時代から明治初期にかけての町名。多摩群由井領のうちで、正しくは八王子千人町と呼ぶ。八王子千人頭十家と千人同心約百家の拝領屋敷地だったことからこの名が付いた。八王子横山十五宿の西に続く地。ほぼ現在の千人町一丁目から四丁目にあたる。

●追分町

市街地の西端にある。大正元年（一九一二）町名改正の際、それまでの千人町と久嶋町の一部が追分町となる。江戸時代の八王子横山十五宿の一つ。江戸時代にはすでに追分と称され、その名が町名となった。東方からは甲州街道が入り、中央部で陣馬街道に分かれ、西南へとぬけている。その分岐点が追分であり、千人同心屋敷跡の碑が建っている。

●久嶋町

ひさしまち

明治十五年（一八八二）、江戸時代以来の久保宿と嶋の坊宿が合併して誕生した。大正六年（一九一七）十月一日町名改正により町名が確定。八王子市制施行の際、久嶋町はなくなり、現在の日吉町と追分町の各一部に編入された。

⑥多賀神社

元本郷町四丁目九一二十一

祭神 伊弉諾尊（いざなみのみこと）、

伊弉冉尊（いざなぎのみこと）

例祭 八月第一土・日曜日

社伝によると天慶元年（九三八）滋賀県多賀神社から奉祀したと伝えられている。市街地の西半分の鎮守として「西の総社」と呼ばれている。「東の総社」は、八幡八雲神社。末社には、機守神社をはじめ大鳥神社、天満神社、稻荷神社、厳島神社、日枝神社、第六天社が祀られている。社額、千貫神輿が有名である。

文応元年（一二六〇）北条時頼が諸国巡行の折病に倒れ、病氣平癒を祈願したと伝えられている。また一説に、散田村の高宰社を勧請したとも伝えられている。

慶應四年（一八六八）三月六日の甲州勝沼での戦いに敗れた甲陽鎮撫隊が、敗走の末、三日後の三月九日に集結した場所といわれている。



多賀神社鳥居



多賀神社全景

●多賀神社社号額

慶応二年（一八六六）第二次長州征伐の折り、千人同心神宮寺金一郎、川村豊左衛門らによって奉納された。裏面に次の様に彫られている。

慶應二年丙寅春

後進發御供在阪中造營奉獻

多賀神前

神宮寺金一郎 橘正敬

願主 川村豊左エ門 藤原秀守

鹽野幸七郎 源光直

額細工司 豊田佐兵エ



多賀神社拝殿

●機守神社

祭神 天之棚機姫尊

(あまのたちばなひめのみこと)

天之羽槌雄命

(あまのはつちおのみこと)

例祭 七月七日

勧請年代は不明。一説には、江戸中期、徳川御三家の一つ田安家家臣が公務の為此の地に赴いた時に勧請したとも伝えられている。八王子周辺地域の織物関係者に崇敬されており、大善寺境内の機守神社とこの二社の知名度が高い。



額 号



機守さま



機守神社



千貫神輿

●千貫神輿

当神社の宮神輿は明治十五年東京浅草で建造された。総檜造り、高さ二・五m、重さ三t、関東でも屈指の規模を誇る。例大祭は、昭和四十二年以降八王子まつりに併合して行われている。昭和五十三年より千貫神輿として八王子まつりの名物の一つとなる。約千六百人の担ぎ手による渡御が勇壮に行われる。

● 山車

境内には、八幡町一・二丁目、八幡上町、八木町、追分町、元本郷町、平岡町の山車の保管庫がある。山車は、八月の八王子祭りで曳かれる。



千貫神輿

⑦ 水無瀬橋

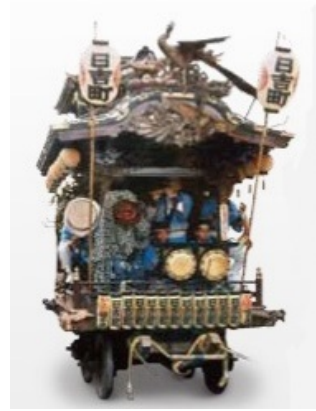
南浅川に架かる橋、日吉町と横川町を結び、陣馬街道が通る。昭和八年鉄筋コンクリート橋になり、昭和六十年現橋梁に改架された。かつてこのあたりで、南浅川は伏流水になったことからこの名が起こる。

日吉町・横川町



諫鼓鳥

八幡町一・二丁目の山車
山車・人形とも市有形文化



日吉町の山車

以前、元八王子の人達は、八王子へ行くとき、この水無瀬橋を利用する人が多かった。南浅川に掛かる木橋で大雨でもなければ何時も水がなく橋がなくても渡れたという。

しかし利用者が年々増えるに従い、橋の必要性が叫ばれてきた。明治二十二年十二月元八王子村横川浅右衛門が発起人となり、有料の木橋を架設、水無瀬橋と命名、通行料が定められた。

一般徒行 一人 金三厘
人力車 金七厘

荷付き馬車 金二銭五厘

この料金で十年間続けられたが、その後また大雨で橋が流失してしまい、明治三十九年三月に下壺分方村山口重兵衛は自ら私財を寄付し、神社の樫を切り、郡と協力し完成させた。しかしその後、この橋は暴風雨や大雨で何回となく流失し往来止めも出たほど。ようやく昭和八年三月、鉄筋コンクリートの橋が竣工、現在の新しい橋に生まれ変わった。

水無瀬橋、荻原橋、暁橋など、もとは民間人で架設したことを忘れてはならない。

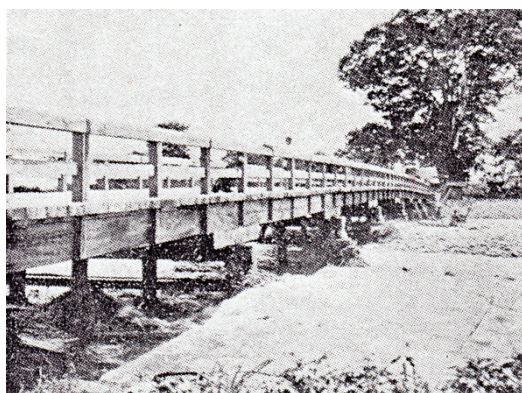


南浅川付近の水無瀬橋



水無瀬橋

●弘法さんと水
昔、欲ばりの婆さんが旅の乞食坊主が求めた一杯の水を与えなかった為、坊主の立ち去った後、川の水は涸れてしまったことによるという。乞食坊主は弘法大師であったというお話。



旧水無瀬橋（大正元年）



旧水無瀬橋の跡

●旧水無瀬橋の跡
追分から始まった陣馬街道が、南浅川の水無瀬橋北側で切れている。明治の頃には、立派な木橋が架けられていたという。今も一部に面影を残しており、旧道も部分的に利用されている。

⑧日吉八王子神社

日吉町八・二十

祭神 国狭槌尊（くにさづちのみこと）
例祭 五月四日

社伝によると天慶三年（九四〇）の創立と伝えられている。文禄四年（一五九五）法印嶋之坊俊盛が社殿を造営し、八王子明神社と称し、由井領の総鎮守とした。八王子十五宿組の祈願所。現在の拝殿は、明治三十五年に改築されたもの。境内に稲荷社延命子育地蔵がある。



日吉神社



延命子育て地蔵尊



延命子育て地蔵尊

●あゆ塚

鮎の供養のため明治三十二年に建てられた。江戸時代、浅川、多摩川中流域で獲れる鮎が幕府に献上された。中でも浅川と多摩川の合流・近くでは、良質の鮎が獲れた。献納の時期になると、幕府の役人が現れ、品や数を改めたという。



あゆ塚



あ ゆ 塚

⑨千人頭拝領馬場跡

千人町

宗格院の北側、長さ百六十三間半・幅七間半・面積千二百二十六坪、縦長の馬術訓練の馬場があった。寛政元年（一七八九）十月調べの千人同心住居地図に記載がある。またいつのころか不明だが、甲州街道から宗格院へと入る道を馬場横町と呼ばれるようになった。

⑩良价山宗格院

千人町二・十四・十八



千人頭拝領馬場跡

宗派 曹洞宗
本尊 聖観世音菩薩
開山 价州良天
開基 山本忠房（良天の兄）
開創 文禄二年（一五九三）
武田氏滅亡後、父山本忠玄と忠房が千人頭として八王子に移り住み、良天もそれに従った。文禄二年、こ



宗 格 院

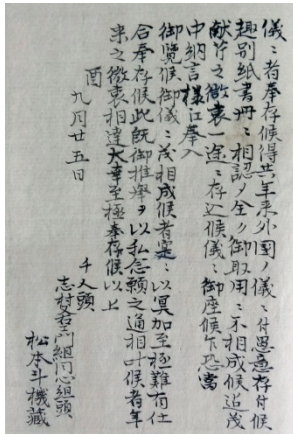
の地に宗格庵と称した草庵を結んだ。その後、興福寺第六世永雲上人によって一寺とし、良价山宗格院となった。後に、臨済宗から曹洞宗に帰し、興福寺末寺となり現在に至っている。墓地には八王子千人同心組頭松本斗機蔵の墓があり、境内には浅川の氾濫を防ぐため築いた堤防の一部が残っている。

●松本斗機蔵胤親の墓

寛政五年（一七九三）から天保十二年（一八四一）、千人同心組頭松本恭蔵胤保の子。幼少より学問を好み、塩野適齋より漢学を学び、歴史・天文・兵学・蘭学等に通じた。蘭学者の高野長英・渡辺崋山らとも交流があった。また、天保八年（一八三七）九月アメリカ船モリソン号事件について「献芹微衷（けんきんびちゅう）」を著し、外国船打ち払いの無謀を説く上書を幕府に提出している。



松本斗機蔵胤親の墓



献芹微衷の書



松本斗機蔵の墓全景

●おセキさま（セキ地藏）

境内左手の八角堂に納められている、大きな石の地藏である。「せき地藏」または「おセキさま」と呼ばれ、咳に悩む人がお参りすると治るといわれている。

この地藏は、千人頭、山本家の娘セキの供養に建てられたものだといえられている。戦前までは、信仰も盛んで、病が治った折りに、竹筒二本にお酒を入れて奉納するという風習もあった。



八角堂



おセキさま



八角堂内部

●石見土手

江戸時代の初め、幕府の命で関東総代官大久保石見守長安が指揮を摂り浅川の氾濫による洪水災禍から守るため築かれた。千人町から元本郷町にかけて築造したといわれている。宗格院の庫裏裏に僅かだが土手らしき石垣が残っているのだが、遺構かどうか定かではない。また、南浅川に近い千人町十一番地周辺には、高さ3m長さ五十mの堤防が残っている。寛政元年（一七八九）作成された「千人同心住宅地図」の中で、川除と記されている。



石見土手

●河西祐助知節顕彰之碑

今から二百年以上前の寛政十二年（一八〇二）、八王子千人同心組頭見習いの河西祐助知節は、妻の梅と長男橘太郎を伴い、同心らと共に北海道勇払の地で北方警備と開拓に従事した。当地で女兒をもうけた梅は、酷寒と二児を育てる苦労が重なり、二十五歳の若さで永眠した。悲しみにくれる祐助が、妻を想って詠んだ「哭家人」の詩は有名である。



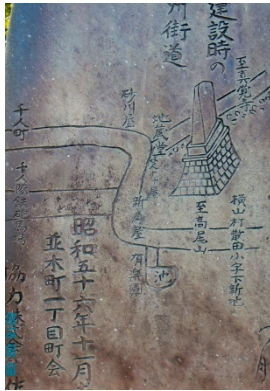
川除の土手と云われる
千人町 11 番地南浅川用地

⑪千人町地蔵堂跡の碑

本尊地蔵菩薩（銅製）、享保年間（一七一六～三六）に再建された。昭和二年（一九二七）多摩御陵建設に伴う甲州街道の改修により廃堂になった。八王子宿の西の出口にあたる所にあった為、地蔵堂は代名詞的な存在になっていた。甲州街道八王子宿の東と西の出入り口は鉤の手に曲がっていた。また、地蔵堂跡の碑の隣には、大正二年に建てられた大きな分岐道標がある。「右高尾山、左真覚寺 道」と刻されている



河西祐助知節顕彰之



地蔵堂跡の碑



地蔵堂跡の碑と分岐道標の碑



並木町
左：旧甲州街道 右：甲州街道



千人同心家子孫の居宅と屋敷塀

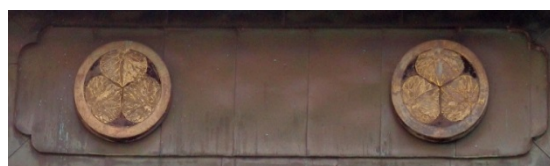
⑫ 祥雲山長安寺

並木町七、一

宗派 曹洞宗
 本尊 準提觀音菩薩
 寺宝 聖觀世音菩薩
 開山 正保元年（一六四四）以前
 開基 陽山嶺叡大和尚
 創建、本堂建立等の詳細は、戦火により焼失し不明である。



祥雲山長安寺



長安寺紋

● 徳本上人名号塔

境内には徳本上人の名号塔が立っている。上人は、紀伊国生まれで、宝暦八年（七五八）から文政元年（一八一八）の人。念仏唱導者。石川日記によると、文化十四年（一八一七）十一月十五日、八王子の大善寺を訪れたことが判っている。また、この他に市内には六基の名号塔が残っている。

● 路面電車の石畳

長安寺参道には、市内の甲州街道を走っていた路面電車の敷石が再利用、保存されている。武蔵中央電気鉄道（路面電車）は、新町から浅川駅（現高尾駅）まで走っていたが、八王子大空襲の被害に遭い、昭和二十年八月以降中止された。但し、昭和三十年三月浅川駅から高尾橋間が開通している。



徳本上人名号塔



横山町米屋呉服店より八日町八幡方面を望む（昭和5年「多満乃誇」）



長安寺の石畳



八日町より横山町方面を望む（昭和5年「多満乃誇」）



八王子市街

●千人同心の成り立ち

千人同心の原型

千人同心の母体は、戦国時代の甲斐である。この武田家のなかに小人頭と呼ばれる役職がある。この小人頭は中間頭とも呼ばれ、九人が各三十人ずつの小人、中間を預かり、信玄の居館の番役や領国内外を結ぶ主要道路の警備にあたるのが任務だった。

当時の武田家は、家臣団の統制法として寄親―寄子制を採用していた。小人頭が寄親にあたり小人が寄子にあたる。この寄子は時と場合によって「同心」と呼ばれることもあり、それから類推して「千人同心」の呼称も、ここに端を発している。

天正十年（一五八二）武田が滅び、本能寺の変で信長が死亡すると、甲斐国は徳川氏の支配下に置かれた。

この時期の家康の施策は、武田旧家臣を出来るだけ登用し、小人頭た

ちも、この時に徳川家の家臣団として再編成され、改めて甲斐国境の警備を命じられている。この時の小人頭は、配下に二百五十人ほどの小人を抱えていた。この小人頭―小人、中間（同心）の形態が、後の八王子千人頭―同心へと移行していった。甲斐の国境警備にあたっていた九人の小人頭が、配下の小人たちと共に落城後間もない、天正十八年（一五九〇）八王子城下に移った。この時に移ってきた小人の数は、「桑都日記」には二百五十名と書かれている。

千人町への移住

現在の八王子市千人町の町名は、千人同心に由来している。八王子城下にいた小人頭と小人たちが、現在の千人町に移住しこの地域を中心に居住した。

「桑都日記」によればこの移住は、文禄二年（一五九三）春正月とされている。このことはまた、八王子の宿場町がこの段階で、ある程度完成

した姿になっていたことをしめしている。

千人同心の成立

八王子城下に配置されていた小人頭と小人たちが、千人町に拝領屋敷を与えられ移転する頃になると、この組織は頭十人、各組の小人五十人の十隊、五百人の編成になっていた。

その後、慶長四年（一五九九）亥春（いのはる）八王子在陣の大久保長安によって再度五百名の増員が計られ、千人の集団になった。

「桑都日記」は、この事実を、慶長五年の項に記している。

事実上この段階で千人同心が成立した。小人頭が千人頭として、小人たちは同心としての役割を担うことになる。

千人同心の拠点である千人町には千人頭の拝領屋敷が軒を連ね、その屋敷は広大なものだった。そのなかで、原家の場合には屋敷面積が約七千

坪で、その間口は百間（約一八〇m）、奥行きが七十間（約百二六m）あった。

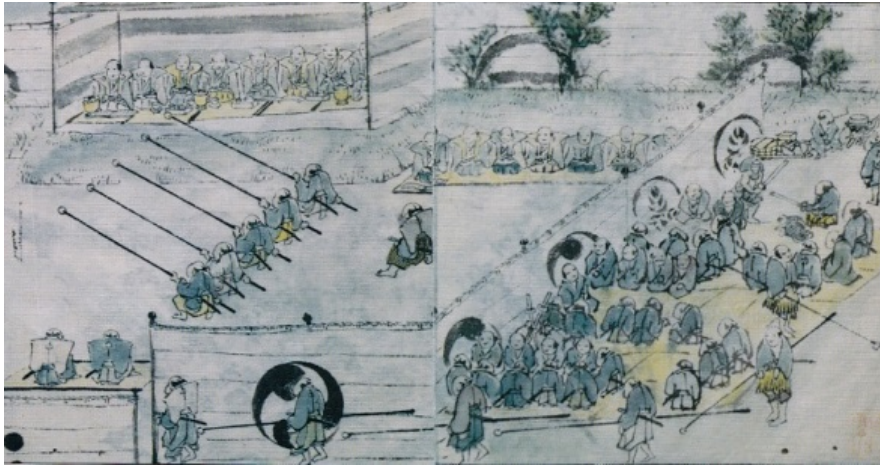
千人頭の家々

もともと九人であった小人頭が十人に増員されたのは、天正十九年（一五九一）だった。その後小人頭はそのまま千人頭となり、近世を通じて継続されていく。

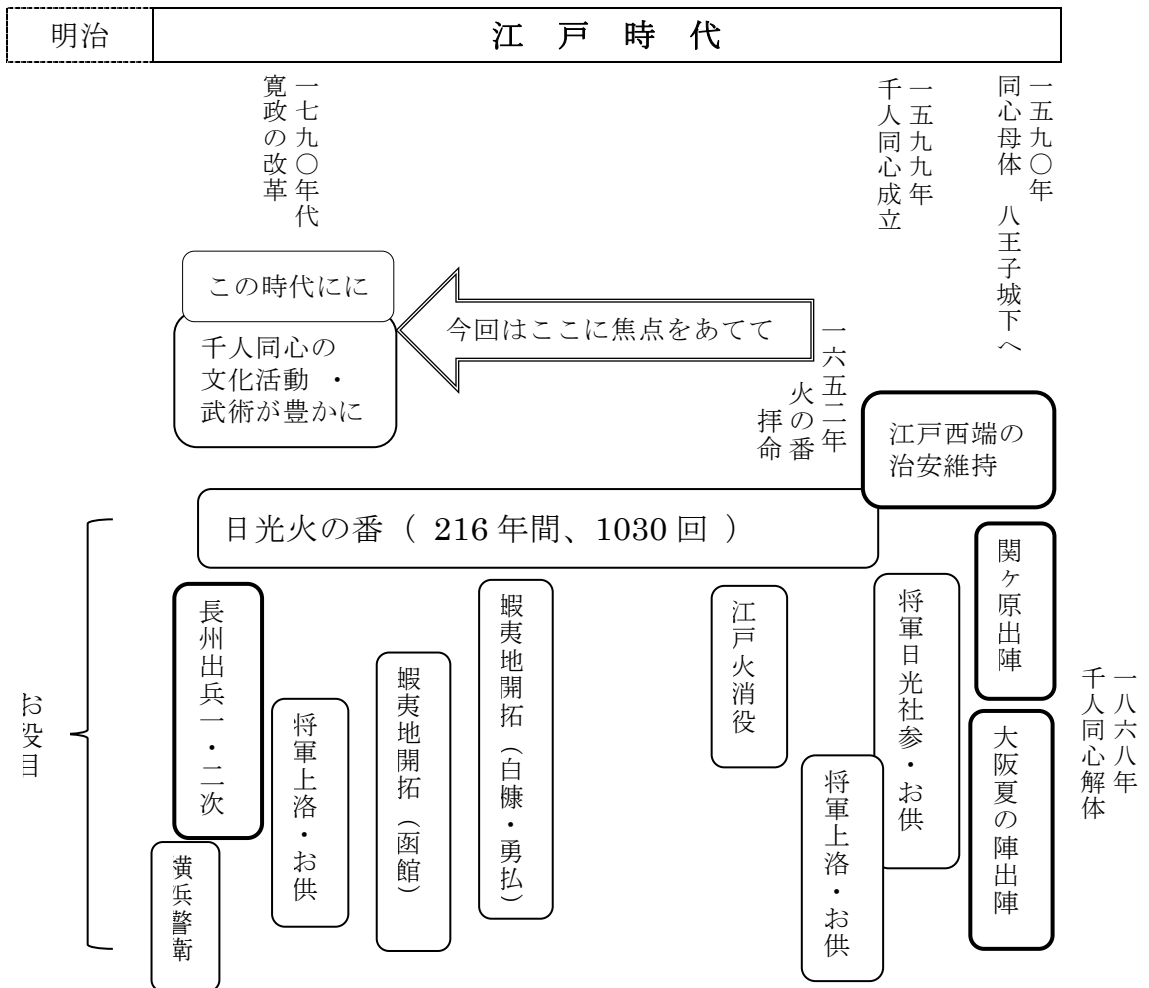
慶長五年（一六〇〇）段階での千人頭十家とは、荻原（下・東）、窪田（上・西）、窪田別家、窪田（下・東）志村、原、中村、河野、山本、石坂の各家々であった。



千人同心組頭の家



郷土調練図



● 武術と文化活動

寛政の改革（一七九〇年代）によって、文武が奨励された結果、剣術を中心とする武術の修行が活発化した。また千人頭や組頭の子弟を中心に、幕府の学問所である江戸昇平坂学問所で学問を学ぶことも盛んになった。

○ 武術

◆ 大平真鏡流

下野国（栃木県）出身の若菜真鏡が、安永七年（一七七八）下野国の大平山（栃木県大平町）で創始した武芸流派である。江戸青山の道場は三千人を擁した。剣術のほかに、薙刀、柔、居合い術と多岐にわたった。その後、八王子で出張稽古が始まり千人頭を始め多くの千人同心が門弟となり、千人町の道場で剣術修行が盛んとなった。大平真鏡流の八王子総指南役となったのが、組頭塩野

適齋である。寛政三年、真鏡齋入門、腕を磨き八王子指南役として多くの千人同心を指南した。これより改之進、哲之輔と塩野氏三代が八王子の大平真鏡流を指導したが、塩野氏のほかに師範がいなかったため千人同心以外の門人が少なく、千人同心の解体とともにその幕を閉じた。

◆ 天然理心流

多摩地方で広がった実践的な剣法の流派で、遠州（静岡県）出身の近藤内蔵之助が寛政年間（一七八九～一八〇一）初期に創始し、江戸両国薬研堀に道場を構え多摩や相州に広めた。

近藤三助は戸吹村の名主坂本家に生まれ、近藤氏を継ぎ二代目になった。自邸に道場を開き千五百人の門弟を教えた。三助の有力な門人に千人同心増田蔵六、松崎正作、宮岡三八らと、農民出身で三代目の近藤（島崎）周助らがいた。天然理心流には、複数の系譜があ

った。そのひとつに千人同心の系統がある。千人同心窪田組組頭増田蔵六は、三助亡きあと、門人実力随一であつたが三助の跡を継がず、千人町の組屋敷に道場を開き指南した。同じ窪田組の松崎正作、松崎和多五郎親子は戸吹村に道場を構え多くの千人同心を指導した。

◆ 柳剛流（りゅうごうりゅう）

千人同心組頭石川良助が日影和田村（青梅市）で千人同心や農民を指導していた。

◆ 甲源一刀流

千人同心比留門半蔵（ひるまはんぞう）が高麗郡梅原村（埼玉県日高市）から八王子に出向き千人同心を指導していた。

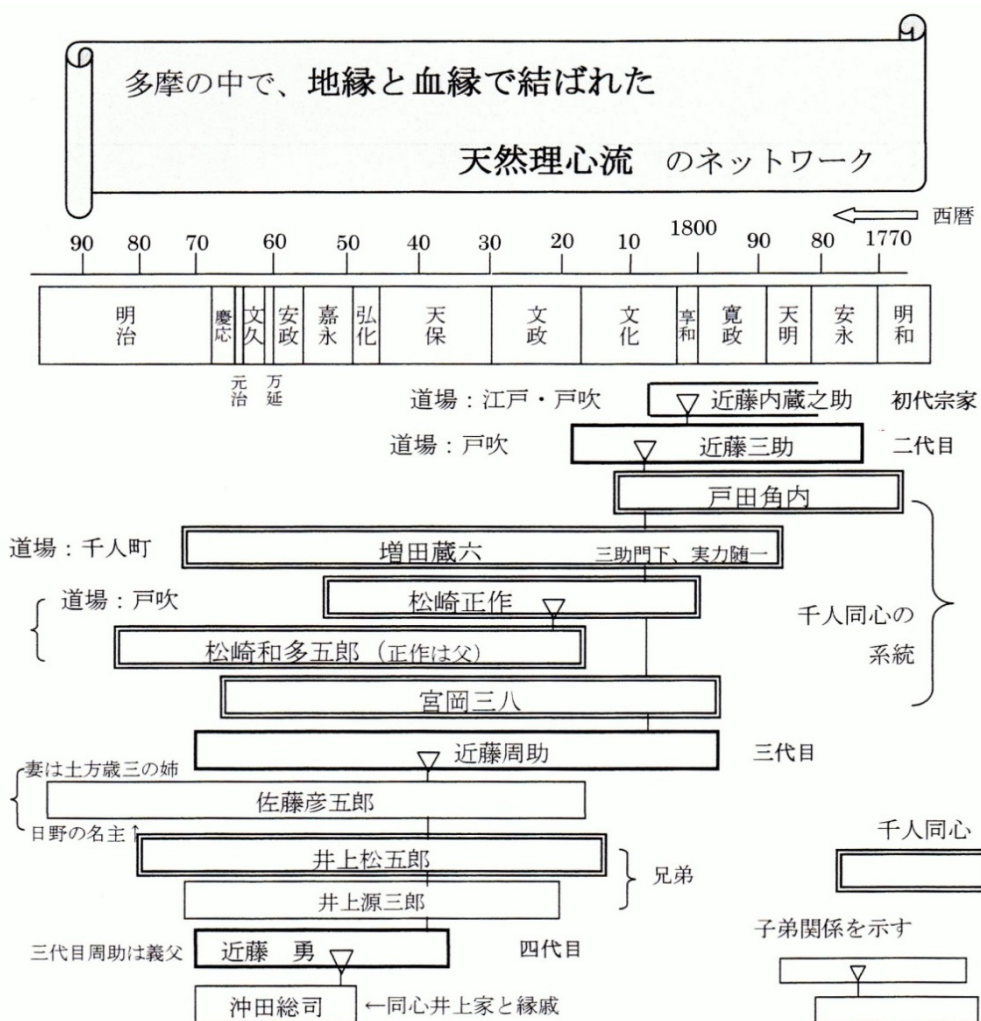


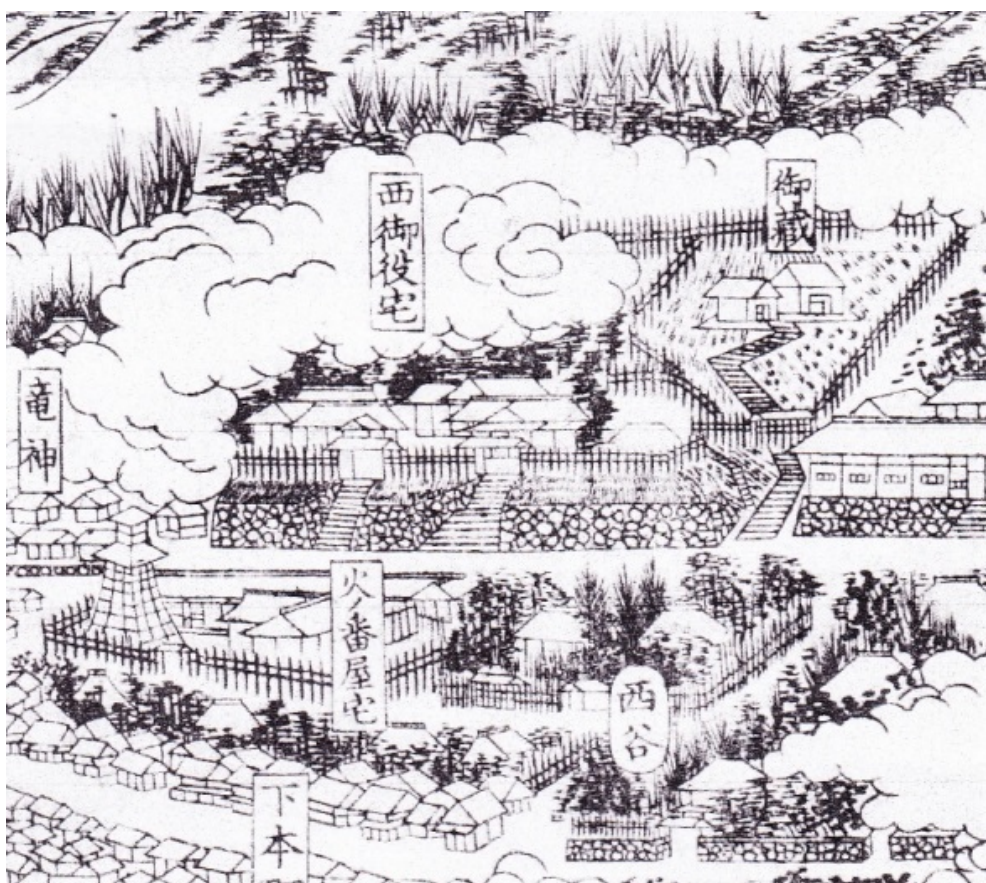


増田蔵六肖像画



蔵六使用の木刀献額





『日光山誌』 火の番屋宅近辺の絵図（部分拡大）



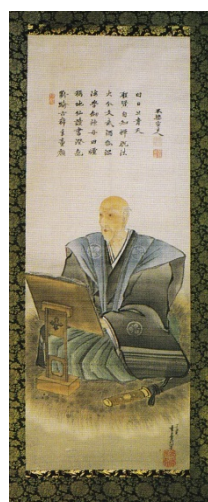
武蔵名称図絵



桑都日記



塩野適齋の家



塩野適齋肖像

○文化活動

この頃（一七九〇年代）、八王子千人同心には、「日光山志」を著した植田孟縉（もうしん）を始めとする知識人が輩出し、私塾や寺子屋を営む者もいた。特に塩野適齋は芳潤館という塾を開き、養父塩野鶏沢（けいたく）の時代から、門弟を昇平坂学問所に送った。

また蝦夷地から帰って文化六年（一八〇九）千人頭に復帰した原半左衛門胤敦は、幕府の地誌搜索の銘を受け、「新編武蔵風土記稿」について、植田、塩野など数名の組頭と共に多摩郡、高麗郡の編纂事業を完成させた。特に地史搜索の成果として、植田孟縉は、「武蔵名勝図会」を著し、又日光勤番の合間を利用し「日光山志」を著した。塩野適齋は「桑都日記」を著し、幕府に献上した。

組頭松本斗機蔵は、幕府代官江川太郎左衛門を中心とする蘭学グループの一員として、モリソン号事件が

起けると、九月、世界の情勢を的確に踏まえたうえで、幕府の外交政策の大転換を求める具体的な提言である「献芹微衷」を著した。この著は、後書きに水戸中納言徳川斉昭の上覧を乞う「願い書」が付けられている。

●モリソン号事件

鹿児島湾と浦賀沖に現れたアメリカ商船モリソン号に対し薩摩藩及び浦賀奉行は「異国船打払令」に基づき砲撃を行った。しかし、このモリソン号にはマカオで保護されていた日本人漂流民の音吉ら七人が乗っており、モリソン号はこの日本人漂流民の送還と通商・布教のために来航していた事が一年後に分かり、異国船打払令に対する批判が強まった。



モリソン号

◎参考資料

- ・新編武蔵風土記稿
- ・武蔵名勝図絵
- ・石川日記
- ・八王子寺院めぐり
- ・武州八王子多賀神社誌
- ・八王子の歴史と文化
- ・八王子千人同心の地域調査
- ・江戸時代に描かれた多摩の風景
- ・八王子の天然理心流
- ・セピア色の風景
- ・八王子・日野の歴史
- ・八王子事典
- ・八王子辞典
- ・八王子発見・路地散策案内
- ・千人のさむらいたち八王子千人同心
- ・八王子市郷土資料館諸資料
- ・歴史と浪漫の散歩道
- ・八王子観光マップ
- ・日野市立新撰組のふるさと歴史館
- ・元八王子の歴史 井上幸太郎著
- ・インターネット各ページ
- ・昭文社
- ・八王子観光マップ
- ・八王子市地図